

『今月の天候と農作業』

通巻第5625号
3月号
平成31年3月7日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

- ・暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高い見込みです。
- ・低気圧や前線の影響を受けにくく、向こう1か月の日照時間は平年並か多い見込みです。

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	20	40	40

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<1週目の予報> 3月9日(土)～3月15日(金)

期間の中頃に高気圧に覆われて晴れる日もありますが、低気圧や前線の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 3月16日(土)～3月22日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けにくく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 3月23日(土)～4月8日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 育苗管理

ハウスの温度と灌水に注意が必要です。緑化は通気性のある被覆資材で2～3日遮光し、日中の温度は25℃まで、夜温も15℃は確保します。硬化時期は、昼温20℃、夜温10℃で管理し、田植え7日前頃から外気に慣らします。温度が高いと徒長しやすく、10℃以下の低温や25℃以上の高温に遭うとムレ苗が発生しやすくなるため、気象情報やハウス内の温度を確認し、温度管理を行います。かん水は午後に行うと床土温が下がり多湿となるため、午前中に行います。床土が過湿の時は、かん水の必要はありません。

2 本田準備

圃場の漏水が激しいと水温が上がりにくく、肥料や除草剤の効果も不安定となります。畦を補修し、代掻きは丁寧に行います。基肥の施用時期が早過ぎると成分が流亡するため、できるだけ代掻き頃に施用します。

3 病虫害防除

いもち病対策として田植前に薬剤箱処理を行います。苗箱に除草剤を誤散布する事故に注意します。

気温が高いとジャンボタニシの活動開始が早くなるため、薬剤による防除時期に注意します。

4 移植作業と除草剤散布

寒波時は無理に移植せず日延べします。移植後及び降霜の予報が出た際は、深水で防寒します。栽植密度は、早期水稲では有効茎（穂数）が不足しやすいいため、極端な疎植は避けましょう。

除草剤は、ラベルの使用時期や使用方法を熟読して適切に散布し、散布後7日間は落水しません。軟弱苗や漏水田、強風時の散布、浅水で拡散が不十分な場合は薬害が発生しやすくなります。

◆麦類

1 排水対策と病虫害防除

雨が多くなるため、周囲や畦間に排水溝を設けます。

赤かび病の防除は、裸麦・小麦では穂揃期に、大麦では穂揃い期から7～10日後（葎殻抽出期）に実施し、天候を踏まえ、その7日後頃にも行います。気温が高く生育が早い圃場が多いため、適期の防除に注意します。

（荒砂 英人）

施設野菜

◆共通事項

蒸散量が多くなるため、日射量の増加に応じてかん水量を増やしていきませんが、かん水間隔を短くし、回数を増やすことで全体のかん水量を増やすようにします。

日中は、内カーテンなどを活用して日射量を調節し、十分な換気を行い、ハウス内の温度が高くなるよう注意します。

夜温が高い場合は、内カーテンを開放し、加温機や循環扇による送風で葉や果実の結露を防止します。

◆きゅうり

蒸散量が増加すると、葉の老化が進み、草勢が低下しやすくなります。高温乾燥が原因なので内ビニールなどを活用し、日射を弱めて湿度を確保します。高温になると果形も乱れやすくなるため、十分な換気に努めます。今年は黄化えそ病（MYSV）の発生がやや多い傾向であるため、害虫の飛込みを防止し、薬剤防除も徹底します。

◆ピーマン

ハウス内が高温になると授粉がうまく行われず、奇形果の発生や果実の肥大不良による赤果等の発生につながります。十分な換気を行い、ハウス内が高湿多湿にならないよう管理します。

気温の上昇とともに収穫までの日数も短くなるため、最低でも3～4日間隔での収穫を心がけ、草勢維持に努めます。混み合っている枝を整理し、光線が中まで入るように整枝・剪定を行い、白果の発生を防止します。

◆トマト

ミニトマトは、気温上昇に伴い裂果が増加します。土壌水分の急激な変化が裂果の主な原因となるため、こまめに少量多回数のかん水を行います。

トマトは、高温で乾燥すると尻腐果が発生しやすくなるため、かん水量を増やしていきま。また、草勢の低下で小玉果になるため、追肥が遅れないように注意します。

◆いちご

温度は、出来る限り生育適温に近づけ、低温管理を心がけます。ハダニ類が多く発生しているため、薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

(黒木正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆さといも（疫病の重要対策）

早生種の定植期です。近年深刻な被害が発生している疫病の伝染を防ぐために、ほ場に保存中のさといもは早めに片付けます。残さの分解には、トラクター速度を遅く、ロータリー回転を速くし、できるだけ細かく破砕します。残さの分解には1ヶ月以上かかるため、余裕をもって作業をしましょう。残さは畑付近の空き地に決して放棄しないでください。

さといもは、連作障害が発生するため、4年以上作付けをしていないほ場を選び、センチュウ消毒を行います。また、さといもは梅雨明け以降、大柄に生長するため、散布した農薬がかかりにくくなります。植え付け時には作業管理通路を10m間隔で作っておきましょう。

種いもは、病害虫のあるもの、芽つぶれのあるものは確実に除き、健全なものを大きき順（30～50g程度）に揃え、センチュウや黒斑病の消毒を行います。薬剤消毒は種いもの表面にしっかり届くよう、土を洗い落としてから行います。その際、水に浮く芋は種芋として使用しません。

◆食用かんしょ

トンネル栽培では、換気作業を徹底します。苗床は温度管理を徹底し、気温の高い日は外気にさらして徒長を防ぎ、健苗の育成に努めます。

◆らっきょう

上旬には、球の肥大と生育促進のため、10aあたり窒素成分で2～3kg程度を遅れないように追肥しましょう。また、球の緑化を防止するため、併せて土寄せを行いましょう。

（杉村 幸代）

果 樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

樹勢強化や新梢・花芽の充実のために春肥を施用しましょう。春肥の吸収効率を高めるためには、速効性の肥料を萌芽直前に施用するのが効果的です。また、発芽期から開花期にかけて、窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

◆完熟きんかん

収穫が終了すると、縮間伐・剪定の時期になります。枝が隣接樹に当たり始めたら縮間伐を行いましょう。剪定は、樹勢や樹齢を考慮し、間引き剪定を基本として、短めの枝を多く確保しましょう。

剪定の遅れは、枝の充実を遅らせ、一番花の結果を悪くします。4月上旬までに必ず終わらせましょう。

◆日向夏

露地日向夏の収穫が始まります。減酸の早い早生日向夏から収穫を開始し、在来系の日向夏は減酸を確認してから収穫しましょう。

◆マンゴー

今年の早期出荷作型では1～2週間生育が早くなっています。幼果期から果実肥大期には、薬害が発生しやすくなります。薬剤散布は、晴天日の午前中の、薬液が速やかに乾く環境下で行いましょう。また、果実の赤色の部分を増やすために、果実のつり直しを行い、緑色の側にも光を当てるようにしましょう。3月は、次第に日射が強くなり、日焼け果が発生することがあります。内カーテンや遮光ネットを利用し、日焼けを防止しましょう。

後期出荷作型も順調に生育していますが、生育にばらつきが見られています。昇温は焦らず、生育を確認しながらじっくり行いましょう。開花期には、早朝換気や夜間の十分な加温によって湿度を低く保ち、花の時期から病気の発生をしっかり抑えましょう。

2 落葉果樹

◆梅・桃

今年は気温が高く推移し、生育が早まっています。開花期～展葉期にかけては病害虫が一斉に発生します。予防や初期防除を徹底しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆夏秋ギク

7月出荷作型の挿し芽を上旬から行います。挿し穂は無病で充実した揃いの良いものを晴天の午後に採穂します。

6月出荷作型の「フローラル優香」は、消灯前後を問わず生育期間全般で低温に遭遇した場合、貫生花が発生しやすくなるため、電照期間中から温度を確保するように努めましょう。

「精の一世」は、親株時の低温遭遇によって幼若性を獲得している場合があるため、定植後から13℃程度で加温を行いましょ。

◆スイートピー

3月は気温が上昇し、天候も不安定になることから、草勢が急速に低下しがちです。植物を十分に観察し、こまめな施肥を行うことで草勢の維持に努めましょう。なお、根が傷む恐れがあるため、高濃度の液肥の施用は避けましょ。

また、花シミや灰色かび病が発生しやすくなるため、循環扇の活用や微生物農薬のダクト散布とともに、除湿のために強制的な換気を行いましょ。

下旬からは採種の交配期となります。採種株は必ずつる下げを行うとともに、授粉後に着莢が確認されるまではかん水をやや控えめにしてください。

◆デルフィニウム

沿海地域では3番花の出荷時期になります。気温が上昇するため、茎が軟弱にならないよう日中の換気は十分に行うとともに、必要に応じて葉面散布等による追肥も行いましょ。

◆ホオズキ

8月出荷作型の植え付け期となります。萌芽時の生長点の焼けを防ぐため、マルチの穴あけは適期に行います。

また、気温の上昇に伴い、ハウス内への害虫の侵入も多くなるため、防虫ネットの設置やほ場周辺の防除は早めに行いましょ。

◆ラナンキュラス

3月は気温が上昇し、開花速度が早くなります。気温に応じて切り前を調節ましょ。また、日中の温度管理は、収量確保のため15℃程度を目安にましょ。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

豚について、2月末現在で、岐阜県、愛知県を含む5府県において、豚コレラの発生が10例発生し、野生イノシシにおいても、145例の豚コレラ陽性事例が確認され、感染が拡大しています。また、アフリカ豚コレラは、ベトナムで初の発生が確認され、さらに、中国の旅客の携帯品からは、10例のウイルス陽性事例が確認されており、国内への侵入リスクが高まっています。これらの法定伝染病から農場を守るため、豚舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。

鶏について、渡り鳥が大陸に帰るまでは、鳥インフルエンザの発生リスクが続くため、気を緩めることなく、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜・家禽

今月は、外気温の日較差が大きくなり、家畜や家禽の免疫力が低下し、呼吸器病等の感染症が発生しやすい時期となります。

このため、朝夕の畜舎カーテンの開閉や舎内温度が上昇する昼間は換気扇による換気、細霧による湿度管理等を行い、舎内の温湿度環境を整えてください。また、病気の発生時は早期対処ができるように、家畜の健康状態の観察を徹底しましょう。

(三角 久志)

工芸作物

◆ 茶

1 春整枝

春整枝は、2月下旬～3月上旬の平均気温が10℃となる頃を目安に実施します。整枝の高さは、葉層を8cm程確保できるように、去年の最終摘採面から3～5cm上げた位置とします。

また、秋整枝を実施した茶園では、越冬芽に掛からない高さで丁寧に整枝します。但し、中山間地域等で越冬芽の寒害（芽つぶれ）が多発している場合は、一～二節程度刈り落とす対応を行います。

2 芽出し肥の施用

芽出し肥は、一番茶摘採の25日前までに硫安等の速効性肥料を施用します。各地域の施肥基準に準じ、うね間だけでなく雨落ち部まで幅広く施用します。施用後は、流亡防止と分解促進のため、うね間を軽く攪拌します。

3 防霜対策

防霜を開始する時期は、秋整枝した茶園では一番茶萌芽の15日前から、春整した茶園では春整枝直後からとし、いずれも一番茶の摘採が終了するまで実施します。防霜ファンの設定温度は、萌芽期前後は3℃、一～二葉期は5℃、二葉期以降は7℃とします。

スプリンクラーで防霜する場合は、摘採面の気温が萌芽期前後は0℃、一～二葉期は1℃、二葉期以降は2℃となったら散水を開始します。

今年も、暖冬傾向で、一番茶芽の生育が早まる可能性が高いと予想されます。予期せぬ低温により被害が発生しないよう、防霜対策に万全を期しましょう。

4 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃です。春整枝と裾刈り後は、速やかに地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布します。

5 定植

露地で育苗した苗の定植は、2月下旬～3月中旬が適期です。ハウス等の施設内で育苗した苗は、定植後の極端な低温を避けるため、一番茶前（4月）の定植が適切です。

なお、ペーパーポット苗を定植する場合は、定植後の乾燥防止のためポットの上部が植穴より上に出ないように注意が必要です。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 採取

発生したシイタケは、目標の品柄に応じて適期に採取します。

雨子での採取は、乾燥に時間がかかる上、品質低下の原因になるため、なるべく晴天を選んで日和子で採取します。また、ほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないように丁寧に採取します。

採取容器は通気性が良く、浅いもの（専用の採取カゴ等）を使い、ヒダに触れないよう柄を上にして入れます。採取後は、振動を少なくして、できるだけ早く乾燥場に運び、エビラなどに広げて品質の低下を防ぎます。特に雨子は素早く処理します。

2 乾燥

高温での急激な乾燥は品質の低下を招きます。乾燥初期は低めの温度設定とし、乾燥機内の温・湿度や換気に注意しながら徐々に温度を上げます。

(古澤 英生)

◆たばこ

品質・収量の確保に向けて適期・適切に健苗の移植に努めましょう。

1 移植は、葉数が9～10枚（米粒大の心葉まで含めた枚数）の白い根が肥土全体に覆っている根張りの良い苗を選んで行いましょう。

葉数が少ない小苗を移植すると、本畑での活着と生長が遅くなり、また大苗では、本畑初期の低温による不時発蕾（葉数減少）を生じやすくなります。

植穴は、直径10～13cm、深さ13～15cm程度に揃えましょう。

極端な深植え、浅植えは、初期生育が遅れ、不揃いの要因となります。

また、移植の際は、抱土が露出しないよう注意しましょう。抱土が露出していると乾燥し、根の伸張が悪く、活着が遅れ、不揃いの要因となります。

移植後は、移植苗の確認手直しを行い、活着促進に努めましょう。

2 移植後の管理作業として、

①排水溝の完備を徹底し、生育不良、病害発生防止に努めましょう。

②マルチ片の回収袋を設置し植付け穴のちぎれそうなマルチ、ほ地内に飛散しているマルチ片を回収しましょう。

③ドリフト（農薬飛散）対策として、他作物が隣接する場合は、周辺農家との話し合いを行い、障壁物の設置やのぼり旗の設置等を行いましょう。

④黄斑えそ病の発生が懸念される場合は、防虫ネットの設置や共同防除に向けた話し合いを行い、発生防止に努めましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

3月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	育苗時の発生の有無に関わらず、移植時の箱施薬を徹底します。
	スクミリンゴガイ	—	越冬場所である水田土壌表層部を細かく耕耘して殺貝します。この場合、土壌は硬く、耕耘ピッチは小さいほど効果が高くなります。貝の生息量が多い場合には、本田施用を実施します。
施設野菜類	病害全般	—	天候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底するとともに早期防除に努めます。 また、夜温が高めの加温機が稼働しない日は、施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要です。
冬春きゅうり	うどんこ病 べと病 灰色かび病 褐斑病	並 多 並 やや少	平年に比べ、べと病の発生が多く見られます。既に発生が多いハウスでは、1週間間隔で複数回の連続防除を徹底します。 また、薬剤の感受性低下（耐性菌の出現）を防ぐため、薬剤のローテーション散布を行います。
	黄化えそ病 (MYSV) ミキイアザミウマ	前年・前々年より少ない 少	黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤が付着しにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(移植時の留意点)	—	ウイルス媒介虫でもあるアザミウマ類、コナジラミ類などに対して、抜根する前の防除を徹底し、抜根後は少なくとも20日間は蒸し込みます。次作の定植時に薬剤を施用し、防除を徹底します。
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	並 並 並	斑点病・黒枯病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。また、罹病葉は重要な伝染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	ミキイアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	やや少 やや多 並	いずれの害虫とも、今後、暖かくなるにつれて増加する恐れがあります。特にアザミウマ類の発生が多いところでは、最少でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 黄化葉巻病(TYLCV) タバココナジラミ	やや多 やや多 やや少 並 並	葉かび病、すすかび病、灰色かび病は多湿条件で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。 黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、早期に根ごと抜き取り適切に処分し、媒介虫であるタバココナジラミの防除も徹底します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類 アブラムシ類 ヒラズハナアザミウマ	やや少 並 やや少 やや少 多	いずれの病害虫も多発してからでは根絶は困難なので、低密度のうち定期的に防除を行います。 ハダニ類は、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群がいるので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 ヒラズハナアザミウマは寄生花率10%以上で被害果が発生する恐れがあります。低密度時に防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病	並 やや少	いずれの病害も越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除します。そうか病は、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行います。
	ミカンハダニ	少	生息密度が高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季(3月上中旬、萌芽前)にマシン油乳剤による防除を行います。
茶	カンザワハダニ	やや多	防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期(～3月中旬)です。株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分に薬液が到達するよう丁寧に防除します。
1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。			
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、 http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki です。			